

# 令和4年度 全九州高等学校登山競技大会 予報1号

## 1 大会山域の自然と歴史

九州本土最高峰の中岳（なかだけ：1791m）をはじめ、久住山（くじゅうさん：1786.5m）や大船山（たいせんざん：1786.3m）、星生山（ほっしょうざん：1762m）、三俣山（みまたやま：1744.7m）などが連なるくじゅう連山は、「九州の屋根」とも呼ばれ、1934年には阿蘇山（あそさん）\*注とあわせて「阿蘇くじゅう国立公園」に指定された。また、「くじゅう」がひらがな表記であるのは、山麓に久住町（くじゅうまち）と九重町（このえまち）があり、山名をめぐって「九重」か「久住」かの論争があったことから、両町に配慮してのことである。

阿蘇山、くじゅう連山は現在でも噴煙を上げる活火山であるが、それぞれ火山の種類は異なる。阿蘇山が火山活動によって大きな凹地のできたカルデラ火山であるのに対し、くじゅう連山は鐘状の複合トロイデ火山であり、お椀をふせたような山々が並び立っている。今回のコースである一目山（ひとめやま）付近には、この火山活動の地熱を利用した八丁原（はっちょうばら）地熱発電所があり、多くの電力を生み出している。また、この山域には温泉が点在しており、なかでも三俣山のふもと、標高1300m付近にある法華院温泉（ほっけいんおんせん）山荘は、約2時間歩いてようやくたどり着くことのできる、まさに大自然の中の秘湯の宿と言える。

くじゅう連山と人とのかかわりは古く、くじゅう連山近辺では、弥生時代の遺跡が多く見つかっている。これはくじゅう連山に豊富な水と肥沃な黒ボク土（くろぼくど）があったからだと考えられている。平安時代になると天台密教の影響で、自然との融合を教義とした神仏習合の山岳信仰が生まれた。多くの登山者で賑わう法華院温泉山荘は、かつては天台宗の一大霊場であった。鎌倉時代に福岡県の英彦山（ひこさん）より養順法印が入山し、修験道場として九重山法華院白水寺（はくすいじ）を建立したと言われている。こうしたことから、くじゅう連山には仏教に関係する山の名前も多い。たとえば「久住」は久しく山寺に在住して修法することであり、「星生」はすべての存在や現象の真の本性を表す仏教用語「法性」に通じる。ちなみに、法華院温泉山荘の北東、大船山と平治岳（ひいじだけ：1642.8m）、白口岳（しらくちだけ：1720m）に囲まれた場所に坊ガツル（ぼうがつる）キャンプ場があるが、「坊ガツル」の「坊」は宿坊を表し、「ツル」は水流のある平地を示している。ここは湿性植物の宝庫で、ミズゴケやスゲ類、ノハナショウブなどが、乾燥地では馬酔木（アセビ）やノリウツギなどが群生している。僧や修験者はここで修行し、ふもとの農民は山頂部の御池（おいけ）を神池とみなし、水源としてうやまつた。

「坊ガツル」と言えば、「坊がつる讃歌」を思い起こす人も多いことだろう。「坊がつる讃歌」は、もともと広島高等師範学校（現在の広島大学）山岳部の部歌（「山男の歌」）であったが、1952年（昭和27年）に、坊ガツルの山小屋で九州大学の学生3人が替え歌を作り、それをNHKの「みんなの歌」で歌手の芹洋子（せりようこ）が歌ったことで、世間に広まったと言われている。

くじゅう連山では、6月上旬にミヤマキリシマの大群落がいっせいに咲き、山肌がピンクに染まる。また、斜面にはコケモモの群落も見られる。コケモモは、火山山頂帯の風衝地に

生える高さ 10 cm前後の常緑の小低木であり、九州ではくじゅう連山の山頂帯だけに分布している。初夏に白色から淡紅色の鐘形の可愛らしい花をつける。ミヤマキリシマ、コケモモは、いずれも国の天然記念物に指定されている。是非、その時期にもくじゅう連山を訪れて欲しい。

\*注　　ここで言う阿蘇山とは、阿蘇五岳 [高岳 (たかだけ)、根子岳 (ねこだけ)、中岳 (なかだけ)、烏帽子岳 (えぼしだけ)、杵島岳 (きしまだけ)] を中心にした東西にのびる連山、外輪山 (がいりんざん) や火口原 (かこうげん) も含めた総称である。

## 2 コース概況 (大会 1 日目)

(九重青少年の家～下泉水山～上泉水山～黒岩山～牧ノ戸峠～星生山～牧ノ戸峠～長者原～九重青少年の家)

九重青少年の家から南にまっすぐに延びるコンクリートの舗装道を歩き出す。コンクリート道を左に折れ、東に向かうと、やがてやわらかな黒土の地面となる。野焼きのあとであれば、背丈の高い草もなく、見晴らしは良い。九重青少年の家から下泉水山までの登山道ははっきりしていないので、草に隠れた踏み跡や岩に付けられた黄色のペンキを目印にして高度を上げていこう。1120m付近から有刺鉄線跡の支柱が出てくるのでそれに沿って進むと、下泉水山北側の開けた草の斜面に出る。長者原から下泉水山へ向かう登山道と合流するまでこの急斜面を直登する。傾斜がきついので、ジグザグに小刻みに切り返ししながら、焦らずに高度を稼いでいこう。ここを登り切ると、長者原から泉水山へ向かう明瞭な登山道に合流する (1210m付近)。合流地点からしばらく西へ進み、左折して樹林帯へ入っていく。登山道はよく整備されており歩きやすいが、黒土は滑りやすいので注意が必要である。馬酔木 (アセビ) のトンネルをくぐり抜けると、ほどなく下泉水山分岐に到着する。下泉水山 (1296m) の山頂の露岩は 360 度の絶景であるが、狭いため、今回は立ち寄らず、登山道を真っ直ぐに進もう。しばらく進み、上泉水山の主稜線を東側から回りこむように急な斜面を登り詰めると、一気に視界が開け、三俣山や星生山が眼前に飛び込んでくる。眼下には長者原のタデ湿原が広がっている。景色を楽しみながら稜線を進んでいくと、やがて上泉水山山頂 (1447m) に到達する。下泉水山から牧ノ戸までのルートは登山客も少なく、静かで牧歌的な山行が楽しめる。

上泉水山から大崩ノ辻 (おおくえんつじ) 分岐を過ぎ、短い急斜面を慎重に鞍部へと下る。鞍部には地震計測器を入れた箱が置かれている。ここから再びゆるやかに登り返し、1456m の大岩を越えて平坦な草原を進むと、やがて黒岩山への分岐に到着する。ここから西へ向かって樹林帯を進むと、数分で黒岩山山頂 (1502.5m) に至る。山頂からの眺めはすばらしい。東には三俣山を中心にしてくじゅう連山の名峰、南には阿蘇山、北西には涌蓋山が一望できる。しかし、山頂は広くないので、長居は禁物である。黒岩山山頂から牧ノ戸峠に向かって下っていくと、登山道には、文字通り黒い岩が所々に露出している。しばらく下ると、広い屋根付きの東屋に到着する。風通しもよく、休憩場所としては最適である。ここからアスファルトで舗装された遊歩道を数分下ると、牧ノ戸峠に到着する。やまなみハイウェイは交通量が多いため、横断歩道を渡る際には十分注意して欲しい。牧ノ戸峠は、売店、トイレがあ

り、多くの登山者や観光客で賑わっている。まるで下山したかのような気持ちになるが、ここから再び、星生山まで高度差 432m を登り返す。集中力を切らさないように注意しよう。

牧ノ戸峠から沓掛山（くつかけやま：1503m）の稜線までは、コンクリートで舗装された急登を進む。沓掛山の肩の稜線まで出ると、南側の展望が一気に開け、ノコギリのような険しい稜線を持った根子岳（ねこだけ）や阿蘇の高岳（たかだけ）が一望できる。沓掛山の肩の稜線にある巨岩は右側から巻いても、左側から木の階段を進んでもよい。岩場を進むと、ほどなくして沓掛山山頂（1503m）に到着する。岩に山頂を示す道標が立っているが、登山道からは左上に見上げる形になるため、見落とさないようにしたい。沓掛山直下は、岩場の下りとなり、いくつかのルートがとれる。木のはしごもあつたりするので、雨天時にはスリッパに注意しよう。岩場を下り終わると、ゆるやかで開放感あふれる稜線が続く。右にナベ谷のガレ場を見下ろしながら、ノリウツギなどの灌木林を通りぬけ、ゆるやかな道を扇ヶ鼻分岐まで登っていく。扇ヶ鼻分岐のすぐ先に星生山の取付がある。いったん浅い水たまりがある窪地まで下り、そこから岩のせり出た急斜面を登り返す。露岩を越えて、ノリウツギやドウダンツツジの灌木林の中を登り、灌木帯を越えると、視界の開けた稜線となる。ここまで来ると、星生山の山頂（1762m）はすぐそこである。晴れていれば、山頂の展望の素晴らしさは格別である。先ほど歩いてきた泉水山、黒岩山、そして三俣山、噴煙を上げる硫黄山（いおうさん：1580m）、さらには天狗ヶ城（てんぐがじょう：1780m）、久住山、稲星山（いなぼしやま：1774m）と、くじゅう連山が 360 度に見渡せる。

山頂の展望、心地よい風を堪能したら、来た道を引き返そう。斜面を少し下ると、左手に西千里ヶ浜（にしせんりがはま）へと下る登山道が見えるので、左折してここを降りる。急斜面で滑りやすいので注意が必要である。西千里ヶ浜まで下り切ったら、牧ノ戸峠まで来た道を辿ろう。

牧ノ戸峠から長者原へは九州自然歩道を下る。交通量の多いやまなみハイウェイを注意して渡り、右手の樹林帯に目をやると、コンクリートで舗装された九州自然歩道が続いている。樹林帯の中は涼しく快適である。ただし、2箇所、注意が必要な場所がある。1箇所目は、九重観光ホテルの入り口から反対側へ、車道（やまなみハイウェイ）を横断しなければならない場所である。2箇所目は、そこからさらに下った、九重ヒュッテの入り口付近である。ここは 20m ほど車道を歩くことになる。週末は車両が多く、時にはスピードを上げた車両が通過することもあるので、横断する際には十分すぎるほど注意してほしい。

寒ノ地獄（かんのじごく）を過ぎてしばらくすると、長者原に到着する。長者原は、くじゅう連山の玄関口である。大型駐車場の横には、お土産屋、お食事処、温泉施設（足湯は無料）の揃った長者原ヘルスセンター、モンベル製品を扱うシェルパという登山専門店、くじゅうの自然や歴史について学ぶことのできる長者原ビジターセンターがあり、くじゅう連山における登山基地となっている。駐車場の公衆トイレは自由に利用できる。「長者原自然研究路案内図」の看板があり、階段を上った左手にはガイド犬、平治号（ひいじごう）という犬の銅像が凜とした姿で立っている。平治号は 1970 年頃、14 年間もの間、登山客を先導するとともに、道に迷った登山者を登山口まで先導したと言われている。

さて、ここから九重青少年の家までは、約 3.2 km の車道歩きである。長者原ヘルスセンター前の信号機付き横断歩道を渡り、飯田高原（はんだこうげん）方面へ車道を北に 500m ほど

進んだ後、道を左折する。左折してすぐに奥郷川（おくごうがわ）にかかる陸橋を渡る。早朝に登った下泉水山の稜線を巻くように車道は続いている。車に気を付けながら進むと、九重青少年の家はもうすぐである。

### 3 コース概況（大会2日目）

（九重青少年の家～皮癬湯～涌蓋越～涌蓋山～涌蓋越～ミソコブシ山～一目山～宝珠屋）

九重青少年の家を出発し、車道を200mほど西進した後、道路を左折し、筋湯（すじゆ）方面へと向かう。緩やかに登ったのちに下る車道を45分ほど歩くと、やがて筋湯温泉への入り口の分岐に到着する。分岐を筋湯温泉方面へと下り、ヘアピンカーブを大きく北北東へと折り返すと、間もなく疥癬湯（ひぜんゆ）の案内板が目に入る。車道から左へ下り、疥癬湯を過ぎて鉄の橋を渡ると涌蓋山登山口に到着する。登山口には危険箇所の案内もあるので確認しておこう。ここから登山道が始まる。杉林の中を登り、分岐の道標を過ぎると、すぐに牧草地へ登りつく。なだらかに登る牧草地を進み、林道との出会いのゲートを過ぎて進むと、やがて電波反射板の鉄塔が立つ石ノ塔（いしのとう：1184m）の平頂を右に望む台地に到着する。ここからは林道を西にたどる。しばらくすると、広い牧草地で砂利道が消える。植林地を北に見て西へと草地の端まで行くと一目山方面へと折り返す分岐がある。その先のゲートを越えて、林の中を進むと、間もなく林道に出る。左折して少し進むと涌蓋越（わいたごし）に到着する。涌蓋越は飯田高原の湯坪（ゆつぼ）と熊本の小国（おぐに）を結んだ古くからの峠である。標識に従って右の登山道へと入っていく。最初のうちは松やコナラの混じる灌木の間を縫うように、えぐられた登山道が続くが、ほどなくカヤの野原となり、本格的な登りとなる。馬酔木（アセビ）やミヤマキリシマなどの株が点々とある中を登っていくと、次第に展望が開けてくる。登山道が急になり、一足ごとに高度をかせいでいる間に涌蓋山の肩の部分にあたる女岳（めだけ：1425m）に到着する。眼下にはノリウツギの群落が見える。ここから馬の背と呼ばれる狭い尾根を進み、再び登り返す。笹が多くなり、登山道に岩石が現れてくると間もなく頂上である。山頂は細長く平らで、玖珠側と小国側にそれぞれ祠が祭られている。標高こそ1500m足らずであるが、独立峰ということもあり、眺めの素晴らしさはいくじゅう連山のどの山にも引けを取らない。円錐形をした端正な山容から、大分県側では玖珠富士（くすふじ）、熊本県側からは小国富士（おぐにふじ）とも呼ばれている。

山頂の展望を満喫したら、来た道を引き返そう。一目山分岐まで戻ったら再び気持ちのよい牧草地を、東から南へと進路を変えて進む、南にそびえるピークを登りつめると、そこがミソコブシ山（1299.6m）である。この山名は味噌を流す竹籠（ミソコシ）を伏せたような姿に由来するという。ここから振り返ると、先ほど歩いた女岳、涌蓋山を一望できる。さらに360度気持ちのよいパノラマの景色を楽しむことができる。ここからは緩やかなアップダウンを繰り返しながら、なだらかな草尾根が続く。1259mの小ピークを過ぎると、やがてドウダンツツジの植え込みが目につくようになる。これは平成12年から16年にかけて毎年350本、通算1750本を熊本県小国町上田地区の有志の方々が植樹したもので、秋には見事な紅葉を楽しむことができる。ほぼ平坦な樹林帯を抜け、ゲートを過ぎると、目の前に一目山の急斜面が立ち上がるようにそびえている。麓をまいてそのまま下山することもできるが、今

回は一目山の山頂へと一気に登ろう。短い距離ではあるが、ほぼ直登であり、体力、精神力が試される。最後の力を振り絞って登り切れば、一目山山頂を示す標識が優しい風とともに迎えてくれる。眼下には九重森林公園スキー場、目の前には獵師山（りょうしやま：1423.2 m）、合頭山（ごうとうさん：1384m）をはじめ、くじゅう連山の山々が広がる。登り切った達成感はひとしおであろう。

展望を堪能したら、山頂から東へ一気に下ろう。車道に出たら、筋湯方面へと向かう。カーブが多いので、車には十分に注意したい。八丁原地熱発電所、九州地区国立大学九重共同研修所・九大山の家を通り過ぎると、本日の宿泊地、宝珠屋（ほうじゅや）はもうすぐそこである。

## 4 「くじゅう」の主な地名

### 大会1日目

・九重青少年の家	ここのえせいしょうねんのいえ		
・下泉水山	しもせんすいやま（ざん）		
・上泉水山	かみせんすいやま（ざん）	・大崩ノ辻	おおくえん（の）つじ
・黒岩山	くろいわやま（さん）	・牧ノ戸峠	まきのととうげ
・杳掛山	くっかけやま	・扇ヶ鼻	おうぎがはな
・星生山	ほっしょうざん	・西千里ヶ浜	にしせんりがはま
・久住山	くじゅうさん	・天狗ヶ城	てんぐがじょう
・稲星山	いなぼしやま	・硫黄山	いおうざん
・三俣山	みまたやま	・寒の地獄	かんのじごく
・長者原	ちょうじゃばる	・奥郷川	おくごうがわ

### 大会2日目

・筋湯	すじゆ	・疥癬湯	ひぜんゆ
・石ノ塔	いしのとう	・涌蓋越	わいたごし
・女岳	めだけ	・涌蓋山	わいたさん
・ミソコブシ山	みそこぶしやま	・一目山	ひとめやま
・八丁原	はっちょうばる	・獵師山（岳）	りょうしやま（だけ）
・合頭山	ごうとうさん		

### 参考文献・参考資料

- ・国土地理院地形図 湯坪 25,000 の1
- ・藤田晴一『新・分県登山ガイド 大分県の山』山と溪谷社
- ・(社) 日本山岳会東九州支部編『登山ガイド 大分百山 改訂版』
- ・五十嵐賢、日野和道、藤田晴一『フルカラー特選ガイド 34 九重・祖母・大崩を歩く』山と溪谷社
- ・法華院山荘ホームページ (<http://hokkein.co.jp>)